

〔賤のをだ巻〕前に記す地紙○扇賣の歩行時分、きざみたばこやとて、是も小奇麗なる形をして、是年ばいの者おやちいくつも引出しを付たる、小簞筒様なる箱を脊負て、品々の刻たばこを入、商などに歩行たり、是は不限○限誤四季ともに家々を廻り、出入取付など出来て重寶なりき、地紙やと同じく、今○享和はすたりて知る人もなし、

〔江戸町鑑天保十一年版〕新材木町里俗多葉粉河岸唱候場所有之

〔煙草記〕歌仙

東風吹や赤柿色の長暖簾。

柏子をそろへきざむ七くさ

○按ズルニ、煙草記ハ、寶曆六年ノ出板ニ係ル、赤柿色ノ長暖簾ハ、烟草賈店頭ノ光景ナルベシ、〔八水隨筆〕多葉粉のひろまりしは、色々の書に様々記して見えたり、予が父弱年の頃、大坂高麗橋にて、唐人の装束したる商人、竹のきせるにて、一ふく一錢づゝにて、人にのませたるよし常にかたりぬ、

〔還魂紙料下〕煙草の一服一錢

此書○八水隨筆の作者、姓名は詳ならざれど、江戸の士にて、享保元文中を経たる事、卷中に見えたり、其父の弱年の比といふは、承應明曆のころにやあらん、

〔尾張名所圖會前編四〕高倉結御子神社○中 本地堂に毘沙門天を安置せしも、今は社人の家に

納むしかれども、例年正月三日には、當社の神供所にて此像を開扉し、諸人に拜せしむ、○中 此日神前にて、きざみたばこ、或は飴にて作りし小判を商ふ、

〔商人職人懷日記二〕信州に涌出る金

のべ澤の金山最中の時分、賑はしきに目とまり、よろづ見めぐるに、○中 葉たばこは賣て、きざみ